

『未盗掘古墳と天皇陵古墳』

松木武彦著／小学館

古墳や遺跡が好きなので、この種のテーマの本をたまに読む。考古学や古代史ファンというのは多いようで、書店では新書や文庫本で「〇〇の謎」など古代史関係のセンセーショナルなタイトルの本が並ぶ。そういった本の多くは、素人が読みやすく、わかったような気分させてくれる。しかし内容的には、まじめにその分野の研究を積み重ねている専門家から見るとおそらくとんでもないことが書かれているものも多いのではないかと内心思ってしまう。

そのような中で本書は、現役の大学の考古学の先生が自身の研究経験に基づき古墳の発掘について一般向けに書いた本である。タイトル、装丁ともにまったく地味で、書店に山積みされることはないが、新しい内容と著者のメッセージがたっぷり詰まった本である。この分野の専門家の方には常識的なことなのであろうが、古墳の発掘はどのように行われてきたか、史実の解明にどのように貢献してきたか、古墳の発掘が抱える問題点などを、研究者として古墳の発掘に携わってきた著者が、素人に媚びることなく語っている。

タイトルにある未盗掘古墳とは、墳墓として完成以降一度も盗掘を受けていない古墳のことである。天皇陵を含め現存するほとんどの古墳は盗掘を受けているとのことであるので、未盗掘古墳の発掘に携われることは一人の考古学者の研究人生のうちで何度もあることではないらしい。当然、未盗掘古墳の数は今後増えることはない貴重な研究対象でもある。著者は2度未盗掘古墳の発掘を経験していて、本書にはその発掘過程が詳述されている。発掘作業は根気と技術のいる作業であり、大学の研究室総出で長期にわたり慎重に行われる。途中、思い通りにいかないことや、様々な障害にも直面する。発掘現場には大学院生も加わり、そこから将来の考古学者も育つ。発掘が佳境に入り、千数百年の間手つかずのタイムカプセルである石室に到達する。読んでいて、まるで自分が発掘作業に立ち会っているかのようにぐいぐい引き込まれた。ひとつの未盗掘古墳が発掘されると、多くの事実が明らかになる。新しい事実が明らかになるたびに古代史は少しずつ塗り換えられている。発掘技術も進歩を重ねているらしい。当然ながら、考古学は実証的で日進月歩の学問であることを、素人ながら感じることができた。

古墳を発掘するということは、古代人の埋葬施設を暴くことである。目的は学

術調査であるが、副葬品を盗み出す盗掘と結果的に行っていることは同じである。また、未盗掘古墳の処女発掘は一度限りであり、技術的に不用意な発掘作業をしてしまうと有機物の痕跡などを見つけることができず貴重なタイムカプセルが台無しになる。なぜ古墳を発掘するのか、という著者にとって自身の研究の否定にもなりかねない重いテーマについて、著者が自問し答えを探している過程が多く、のページを割いて述べられている。専門分野は違えど、頷くことが多かった。

本書は考古学の研究の現場を一般の人に見せてくれる書であると同時に、学生時代から大学の研究室で真摯に研究に取り組んできた著者の半生記でもある。そのいずれも事実と実体験のもつ説得力にあふれ、心地よい読後感を覚えた。

執筆 者 紹 介

下村 匠

環境社会基盤工学専攻教授。専門領域は、コンクリート材料、コンクリート構造。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『未盗掘古墳と天皇陵古墳』 松木武彦著 小学館 2013年 1,620円

[ブックガイド目次へ](#)